



日本植物病理学会ニュース 第62号

(2013年5月)

【学会活動状況】

1. 大会開催報告

平成25年度日本植物病理学会大会は3月27日(水)から29日(金)まで、岐阜市の岐阜大学において開催されました。岐阜では初めての大会開催でした。曇り模様の少し肌寒い中で始まった大会でしたが、中日以降は天候に恵まれ、キャンパス内のモクレンや桜の花が春の色彩を添えていました。今年度は、中部地区の担当で、大会事務局を岐阜大学に設置し、静岡大学、名古屋大学、三重大学、富山県立大学、石川県立大学、福井県立大学、名城大学、および農研機構野菜茶業研究所ならびに中部地区の7県の農業試験場等の植物病理学会員ほか植物病害関係者60余名の方々に大会運営委員をお願いし、各講演会場の設営や当日の運営にご尽力いただきました。とくにプログラム委員長の名古屋大学川北一人先生、大会幹事長の清水将文先生をはじめ、景山幸二先生、須賀晴久先生には心から感謝申し上げます。

今年度の講演題数は387題で、また学生優秀発表賞の選考対象は119題と、昨年よりも1割ほど少なく、大会参加者数に多少の不安もありましたが、最終的には大会参加者は名誉会員および永年会員をはじめ、賛助会員等も含め900名を超え、大盛況となりました。一会場当たりの運営担当委員数が十分でなかったにもかかわらず、スムーズに進行できましたことは、ひとえに講演者、座長および各会場の進行係の皆様のご協力のおかげと感謝しております。

懇親会は27日の夕刻、大学キャンパス内のブルーシートを敷き詰めた体育館で開催され、約500名の皆様が参加されました。静岡大学瀧川雄一先生の司会によりまして、来賓の岐阜大学の小見山章副学長、および岐阜県農業技術センターの矢野秀治センター長から歓迎のお言葉を賜りました。ついで、岐阜大学名誉教授池上八郎永年会員の音頭で乾杯して開宴となりました。会場では岐阜県の地酒や名産品に加え、十分な料理がテーブルに並び、出席者の活発な意見交換やご歓談の中、大いに盛り上がりました。

千人規模の参加者をお迎えする会場の選定においては、岐阜市内には結局岐阜大学を使うことしかないと分かり、ご参加の皆様には駅から離れた大学まで来て頂くご不便をお掛けしましたことをお詫びいたします。

最後になりますが、本大会が大きなトラブルもなく滞りなく終わることができましたのは、学会役員、評議員はじめ大会参加の皆様、中部地区の会員の皆様、さらに農研機構野菜茶業研究所、中部地区各県関係者の皆様のご支援の賜物とあらためて厚くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。(百町満朗)

2. 研究会・談話会等開催報告

(1) 第13回植物病原菌類談話会

日本植物病理学会大会最終日の平成25年3月29日、閉会式終了後の17:00から岐阜大学全学共通教育棟102号室において第13回植物病原菌類談話会を大会開催地実行委員会である岐阜大学の協力も得て開催した。大学、公立の試験研究機関、独立行政法人、検疫機関、農薬や種苗会社、農業団体など、学生・研究者126名の参加があった。

今回の談話会は玉川大学の渡辺京子先生がコーディネーターを務め、「稲熱病(菌)研究に学ぶ」というテーマと日本大学生物資源科学部の藤田佳克氏の司会進行の下で、いもち病(菌)研究の成果について講演が行われた。それぞれの講演題目と講演者は、「シコクビエ伝播の指標としてのいもち病菌」加藤 肇氏、「いもち病をみる一発生子察の立場から」吉野嶺一氏、「イネといもち病菌の相互作用部位の顕微鏡観察でわかってきたこと、まだわからないこと」古賀博則氏(石川県立大学)、「イネいもち病抵抗性の持続的な利用に向けて」小泉信三氏(国際協力機構筑波国際センター)であった。第13回植物病原菌類談話会は多大な研究蓄積を有する我が国のいもち病研究の蓄積の一部を、限られた時間ながら、当該分野の代表的研究者にご紹介頂くことで、いもち病菌の研究に関する理解を深めると同時に、他の植物病原菌類の研究分野へ手法の応用や

研究戦略の発展的適用のきっかけを提供することを目的とした。各講演者共にこれまでのご自身の研究成果を基礎に大変興味深い事例に基づいて熱心に解説された。

最後に、本年の1月1日より発効した国際藻類・菌類・植物命名規約（メルボルン規約）にて第59条が改正された関連にて、統一する方向となったいもち病菌の学名についての検討状況を、当談話会幹事でもある神戸大学中馬いづみ氏により「国際植物命名規約改定に伴ういもち病菌属名に関する議論の現状」との標題にて話題提供を受けた。これまでの不完全世代名である *Pyricularia* と完全世代名の *Magnaporthe* の何れをその属名として使うべきかについて大きな議論が巻き起こっている現状について報告を受けた。本問題については、植物病原菌類談話会では今後も継続的に関連内容についての話題提供を行いたい。

開催準備にあたってご支援頂いた大会事務局の方々に深く感謝いたします。来年度も植物病理学会大会にあわせて本談話会の開催を予定しております。（青木孝之）

(2) 第23回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム

第23回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウムは、平成25年3月30日、岐阜大学で開催された。平成25年度大会に続く一連のスケジュールの最後に当たったが、公的研究機関、大学、農薬メーカー、農業団体等計154名（講演要旨購入のみも含む）の方の参加を得て、講演が行われ熱心な討議がなされた。

講演は計6題あり、最初に名城大学農学部の荒川征夫氏から、「アジア各地のイネ紋枯病菌で検出されるトレハラーゼ遺伝子の一塩基多型とパリダマイシン感受性の多様性解析」について講演いただいた。講演ではアジア各地（中国、韓国、日本（沖縄も含む）、台湾、インド）から採集されたSSR遺伝型が顕著に異なるイネ紋枯病菌（25菌株）についてパリダマイシン感受性が検定され、遺伝的多様度が高い中国個体群だけでなく、日本（沖縄を除く）、韓国、台湾の分離株にもパリダマイシンに低感受性と評価される菌株の存在が確認された。更に、供試菌株についてパリダマイシンの作用点である菌体蓄積糖（トレハロース）の代謝利用に関与するトレハラーゼ遺伝子の塩基配列を解析し、非同義置換を引き起こすとされる一塩基多型（SNP）変異がパリダマイシンに低感受性を示す要因の一つと推定された。しかし、非同義置換性SNP変異を持たない菌株の中にもパリダマイシン低感受性を示す菌株もあり、上記変異以外に低感受性化に関わる複数の要因があることも示唆された。因みに、演者はイネ紋枯病菌で認められるトレハラーゼ遺伝子のSNPの多様性は、パリダマイシンが使

用され始めるはるか以前から広く存在し、特定の作用点を持つ薬剤の圃場への大量投入による強い選択圧により、多様な遺伝子プールを持つ個体群から耐性菌の顕在化が迅速に起こった事を示す例と紹介した。

次に農研機構果樹研究所カンキツ研究領域の足立嘉彦氏より、「リンゴ斑点落葉病菌および褐斑病菌におけるQoI剤耐性のリスク評価」について講演があった。農研機構のプロジェクト研究の一環として、リンゴの主要病原菌である斑点落葉病菌と褐斑病菌を対象として、岩手県内のリンゴ園におけるQoI剤感受性モニタリング（2006～2009）と果樹研究所内で行われた試験（QoI剤を4～5回/年散布）結果を基に、QoI剤耐性の発達リスクが評価された（2005～2008）。その結果、リンゴ褐斑病菌はQoI剤感受性低下のリスクは低いですが、斑点落葉病菌はQoI剤の連用によって耐性菌の選抜と防除効果の低下が認められ、耐性発達リスクが高いことが示された。但し、斑点落葉病の防除は必ずしもQoI剤だけに依存していないので、QoI剤耐性斑点落葉病菌の存在が防除にどのように影響しているかは不明とされたが、耐性菌管理の観点からQoI剤の年間使用回数は2回が限度との認識が示された。今後は輪紋病やすす点・すす斑病などQoI剤による防除に依存していると考えられる病害について感受性モニタリングが必要との提案がなされた。

農研機構野菜茶業研究所山田憲吾氏より、「静岡県におけるQoI剤耐性チャ輪斑病菌の発生実態」と題して、国内最大の茶産地である牧ノ原台地を中心にこの耐性菌の発生状況の紹介があった。2009～2011年に圃場より採取された輪斑病菌（*Pestalotiopsis longiseta*）のQoI剤耐性菌の分布調査を行う中で、耐性菌（高度耐性）に加え、耐性菌と感受性菌の中間的な反応を示す中度耐性菌が存在することが明らかになった。耐性の原因と考えられる遺伝子変異を解析した結果、耐性菌のチトクロームb遺伝子にはエキソン-イントロン構造が異なる2つのタイプがあり、いずれのタイプにおいても高度耐性はチトクロームb遺伝子のG143A変異、中度耐性はF129Lの変異によるものであることが明らかになった。更に、中度耐性菌のresistance factor (RF) はQoI剤毎に異なり（アズキシストロビン：RF = 56.7, クレソキシムメチル：RF = 5.8）、圃場での分布率も高度耐性菌に比べて相対的に低いため、通常の散布条件では中度耐性菌はQoI剤の効果低下をもたらす可能性は低いものと考えられた。

全国農業協同組合連合会営農・技術センターの宮川典子氏と富士真氏（発表は宮川氏）より、「QoI剤耐性イネいもち病菌の発生と対応」と題して、2012年に一部地域

でオリサストロビンに対して感受性の低下したもち病菌が確認されたのを受けて、これまでの感受性モニタリングの結果および今後の防除対策について紹介された。2006～2011年のモニタリング（23県2,047サンプル）ではQoI剤に対する感受性低下菌は確認されなかったが、2012年に福岡および大分県でオリサストロビン箱施用剤を使用後ももち病が多発している圃場から、オリサストロビンに対して感受性が低下している菌株が分離され、PCR-RFLP法によりチトクロームb遺伝子がコードする143番目のアミノ酸の変異が確認された。また、この耐性菌は他のQoI剤（アゾキシストロビン、メトミノストロビン）に対しても交差耐性を示すことが明らかになった。QoI剤耐性菌は既に山口県を始め、島根、愛媛、福岡、大分および佐賀県の計6県で発生が報告されており、演者らは耐性菌発生地域での被害軽減と未発生地域への拡大を防ぐために、県、行政、メーカー、JAグループ等の関係機関の情報共有化と相互に連携した取り組みの重要性を指摘している。具体的な対策として、①耐性菌発生地域およびその隣接地域でのQoI剤の使用中止、②種子更新や種子消毒および穂いもち防除の徹底、それに③モニタリングの強化を挙げている。また、今後の課題として、今回問題となった耐性菌の伝染経路の解明、耐性菌の環境適応能力およびオリサストロビン箱施用剤の防除暦採用年数との関係解析等が挙げられていた。

高知県農業技術センターの岡田知之氏より、「高知県におけるボスカリド耐性ナスすすかび病菌の発生と遺伝子診断」について講演があり、既に県内のナス主要産地ではコハク酸脱水素酵素阻害剤（SDHI）であるボスカリドに耐性のナスすすかび病菌が広範囲に発生・蔓延していること、またボスカリド耐性菌はSDHIの標的の一つと考えられているSdhBの268番目のヒスチジン（H）がアルギニン（R）に変異した菌株（H268R株）であることが示されたが、本菌株は同じSDHI剤であるベンチオピラドに対して交差耐性を示さなかった。更に、圃場分離菌の中に両剤に対してやや感受性が低下した菌株が見つかり、SdhB遺伝子の塩基配列の解析結果から、これらは全て上記アミノ酸配列の270番目がイソロイシン（I）からバリン（V）に変異した菌株（I270V）であることが明らかにされた。上記報告より、高知県においてはSDHI剤に対して感受性が低下したナスすすかび病菌が少なくとも2種類発生していることが報告された。

最後にクミアイ化学工業（株）の尾崎剛一氏より、「フランスおよび日本におけるCAA系薬剤耐性ブドウべと病菌の発生状況と今後の対策」について発表があった。カル

ボン酸アミド系薬剤（以下「CAA系薬剤」）には、ジメトモルフ、フルモルフ、マンジプロバミド、イプロバリカルブ、ベンチアバリカルブイソプロピル、パリフェナレート の6化合物があるが、本系統薬剤に対しては既に欧州のブドウべと病菌で耐性菌の発生が認められている。講演では、ベンチアバリカルブイソプロピルを中心としてCAA系薬剤の特長と作用機構（セルロース生合成阻害）について紹介された。次いで、ベンチアバリカルブイソプロピルとそのマンゼブ混合剤を用いた効果試験結果から耐性菌発達リスクが評価され、単剤に比べマンゼブ混合剤の方が耐性菌発達リスクの軽減に有効であることが示された。現在、日本におけるモニタリングの結果では、べと病菌の本系統薬剤に対する耐性菌は未発生であり、その要因の1つとしてブドウではCAA系薬剤の使用頻度が低いことが考えられた。しかし、今後日本においてもその使用頻度は増加することが予測されることから、耐性菌対策の必要性が述べられ、クミアイ化学独自の対策案が紹介された。

最後に、今回のシンポジウムの開催に当って、大会事務局の皆様には多大なるご支援ご協力をいただいた。改めて厚くお礼申し上げます。（西村 昭）

(3) 第12回植物ウイルス病研究会

本研究会は1989年に植物ウイルス病研究の推進を願って設立されたが、1991年より原則として隔年で日本植物病理学会大会最終日翌日に研究会をもってきた。11回目の今回は、サクラが咲き乱れ、時折ウグイスのさえずりが響き渡る岐阜大学で3月30日に開かれ、約130名の研究者と学生が参加した。今回の研究会では、病徴の誘導機構とウイルス病研究に対する新技術の2つをテーマに11の講演が行われた。いずれもシンポジウムならではの総合的な講演であり、熱心な議論が行われた。有意義な研究会になったと思う。

第1部の「植物ウイルスの病徴の誘導」では、海外招待者を含め5名の演者による講演があった。まず、竹下 稔氏（九州大学）には、CMVとTuMVの重複感染組織で見出された局所干渉作用について紹介いただいた。小松 健氏（東京大学）には、ポテックスウイルスが起す全身えそ病徴の発現メカニズムの詳細を解説いただいた。望月知史氏（大阪府立大学）には、CMVがタバコに現すモザイク病徴の誘導機構について、CPと2bの役割も含めて解説いただいた。増田 税氏（北海道大学）には、CMV-Y系統のY-satがタバコに鮮黄色病徴を示す機構について、長年にわたって取り組んでこられた研究の歴史も含めて熱く語っていただいた。また、Lim Hyoun-Sub氏（韓国忠南大

学校)には、*Alternanthera mosaic virus* の TGB の過剰発現による病徴解析について、ユーモアを交えて話していただいた。

昼食後は、大木 理 (大阪府立大学) により ICTV 第 9 次報告書によって変更になった最新のウイルス分類の概要が説明された後、第 2 部の「植物ウイルス病に対する新技術」では、5 名によって多様なトピックスが紹介された。宮下脩平氏 (JST・生物研) は数理モデルを中心とした異色の講演を行われ、植物ウイルスの感染動態と適応の機構を示された。世良貴史氏 (岡山大学) は、人工 DNA 結合タンパク質を利用してウイルス耐性植物を作出するというユニークな手法を紹介された。山次康幸氏 (東京大学) は、新たに見出されたレクチン抵抗性によるウイルス抵抗性のしくみと効果を紹介された。吉川信幸氏 (岩手大学) は、潜在性ウイルスを利用したウイルスワクチンの開発経過と実用性を示された。最後に大村敏博氏 (中央農研) は、イネウイルスのタンパク質の長年にわたる機能解析に基づいた抵抗性導入戦略について、熱弁をふるわれた。講演中のウイルスタンパク質の構造と機能を精緻に映像化した動画には、参加者一同が魅了された。なお、講演終了後には当日をもって研究生生活を終了される大村氏に対して、参加者全員から熱い拍手が贈られた。

講演と座長を引き受けていただいた皆さんには、厚く感謝する。また、今回の研究会の開催に当たっては、岐阜大学の百町満朗先生と須賀晴久先生には会場設営等の格別のご支援をいただいた。改めて感謝する。なお、講演要旨集ご希望の方は、大木 (ohki@plant.osakafu-u.ac.jp) までご連絡いただきたい。(大木 理)

(4) 技術士 (農業部門・植物保護) 試験対策セミナー

平成 25 年度技術士 (農業部門・植物保護) 試験対策セミナーは、日本植物病理学会大会の第 3 日目 (3 月 29 日) の 13:00~14:30 に岐阜大学において、当学会技術士対応委員会主催のもと開催された。本セミナー開催に当たっては、百町満朗大会委員長をはじめとする大会委員の先生方には会場設営など、特段のご配慮をいただいた。厚くお礼を申し上げる。本セミナーは当初隔年開講であったが、前年の平成 24 年度大会で大変盛況であったことから、本年も開催することとした。また、本年度、技術士試験制度の大幅な改正が行われるため、その解説を行うことも主眼であった。

まず、技術士対応委員長である難波成任氏 (東京大学大学院農学生命科学研究科) より、技術士制度について概略が解説され、植物保護関連 5 学会として「農業部門・植物

保護」の技術士が 100 人を超えることが最初の目標であること、本年 13 名が技術士二次試験に合格し、累計合格者数が 70 名に達したことなどについて紹介があった。また、合格者のうち約半数が昨年の本セミナー受講者であったことも紹介された。次いで、技術士対応委員であり技術士である濱本 宏氏 (法政大学生命科学部) より、今回の技術士試験制度改正の内容と、第一次試験、第二次試験の概要について解説があった。特に、第一次試験から「共通科目」が廃止されること、第二次試験では「必修科目」が択一式となり、「技術的体験論文」が廃止される等の点が大きな変化である。続く「過去問題を用いての試験対策」に関するコーナーでは、先ず大上大輔氏 (ホクレン農業協同組合連合会) より「第二次試験出願対策および論述の考え方」として、出願する際に必要である業務経歴票の重要さとその書き方について解説がなされ、特に、「業務内容の詳細」の部分は小論文ととらえるべきであり、どのように考え論述すべきか具体的に解説があった。次いで大島研郎氏 (東京大学大学院 農学生命科学研究科) より「第一次試験・受験対策」として、第一次試験の各科目の概要と受験のポイントについて解説され、過去問題を実際に解きながら、選択科目を解答する際のコツも交えて実戦的なアドバイスがあった。さらに、栢森美如氏 (北海道立総合研究機構中央農業試験場) より「第二次試験・記述試験」として、昨年の問題を用いて実際に「骨子表」を作成し、論理的な解答を作成する手順について説明があった。その際に、問題文で何が問われているかを明確にしておくことが大切である。難波氏の司会で行われた質疑応答では、実務経験の算入のことなど受験に関する具体的な質問とともに、植物保護の技術士が今後どのように国内外で活躍する可能性があるのかなど、将来展望に関する情報交換もあった。なお、本セミナーで配布した資料は、日本植物病理学会ホームページにて会員向けに公開する予定である。

大会 3 日目の午後の開催であったが、セミナーの参加者は民間、大学、都道府県、独立行政法人等から 53 名を数え会場には熱気が満ちた。各話題ともいづれも説得力のある内容で、終了後も、講演者を囲んで活発な話し合いが持たれ、活気あふれるセミナーとなった。参加者並びに講演者に対し、主催者一同心よりお礼を申し上げる次第である。

(技術士対応委員会)

3. 技術士対応委員会

平成 24 年度技術士第二次試験 (農業部門・植物保護) で 13 名が合格

平成 25 年 3 月 4 日に平成 24 年度技術士第二次試験 (農

業部門・植物保護)の合格者が発表され、次の13名の方が合格されました(敬称略)。

大平純一(北海道空知農業改良普及センター),安宅 雅(バイエルクロップサイエンス株式会社開発本部;日本農薬学会会員),小池信一(株式会社よみうりサポートアンドサービス),佐藤 衛(農研機構花き研究所;本会会員),若山健二(日産化学工業株式会社農薬化学品事業部;本会会員),笹谷孝英(農研機構九州沖縄農業研究センター;本会会員),三木静恵(群馬県西部農業事務所藤岡地区農業指導センター;本会会員),木澤 悟(住友化学株式会社健康・農業関連事業研究所;植物化学調節学会会員),平山喜彦(奈良県農業総合センター;本会会員),宮崎俊英(長崎県県央振興局農林部長崎地域普及課;日本応用動物昆虫学会会員),藪 哲男(石川県農林総合研究センター;日本応用動物昆虫学会会員),大崎秀樹(農研機構近畿中国四国農業研究センター;本会会員),谷名光治(岡山県農林水産総合センター農業研究所;本会会員)。

今回の合格者を合わせ、技術士第二次試験(農業部門・植物保護)合格者は計70名となりました。本年は、国の独立行政法人から3名合格されました。また、5名が昨年の技術士試験対策セミナー(福岡)受講者です。引き続き、都道府県や民間企業、大学等の教育機関など、さまざまな職場から多くの方の受験をお願いします。平成25年度の技術士第一次試験は平成25年10月14日(月・祝)に行われ、受験申込締切は平成25年7月1日(月)です。また、技術士第二次試験の筆記試験は平成25年8月4日(日)に行われます(受験申込締切は例年5月上旬です)。今年より試験制度が改正されます。詳細は日本技術士会のホームページの試験・登録情報から、試験の実施案内について御確認ください。

日本植物病理学会、日本応用動物昆虫学会、日本農薬学会、日本雑草学会、植物化学調節学会は、技術士・農業部門・植物保護の社会での活躍について、積極的に取り組んでいます。平成25年度も多くの技術士(農業部門・植物保護)の誕生を期待しています。

【今後の学会活動状況】

1. 平成25年度部会開催予定

- (1) 北海道部会
日時：平成25年10月17～18日
場所：かでの2.7(札幌市)
- (2) 東北部会
日時：平成25年10月28～29日
場所：にぎわい交流館(秋田市)
- (3) 関東部会
日時：平成25年9月12～13日
場所：法政大学市ヶ谷キャンパス(千代田区)
- (4) 関西部会
日時：平成25年9月26～27日
場所：岡山大学50周年記念館(岡山市)
- (5) 九州部会
日時：平成25年11月13日
場所：KKRホテル熊本(熊本市)

2. 第9回教育プログラム

- 日時：平成25年8月5～9日
場所：筑波農林研究交流センター(つくば市)

3. 平成25年度植物感染生理談話会

- 日時：平成25年8月19～21日
場所：北陸栗津温泉(小松市)

4. EBC研究会ワークショップ2013

- 日時：平成25年9月18日
場所：全農ビル(千代田区)

5. 第7回植物病害診断研究会

- 日時：平成25年9月27～28日
場所：岡山大学(岡山市)

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内 学会ニュース編集委員会
FAX: 03-5980-0282

または下記学会ニュース編集委員へ：

高橋賢司, 根岸寛光, 有江 力, 宇賀博之, 芦澤武人
各委員宛

編集後記

学会ニュース第 62 号をお届けします。本号は、大会とそのサテライトとして開催された研究会・談話会の報告を中心に掲載しました。

大会は、初めて岐阜で開催され、桜やモクレンの花が咲く岐阜大学を会場に行われました。講演題数は 387 題と昨年よりも少なかったのですが、参加者は 900 名を越し、盛会裏に終了しました。大会委員長の岐阜大学・百町先生をはじめ中部地域の各大学、国、そして各県の大会運営委員の皆様には大変お世話になりました。準備、運営のご尽力に深く感謝の意を表したいと思います。

大会後には植物病原菌類談話会、殺菌剤耐性菌研究会、植物ウイルス病研究会が開催されました。いずれの会も 100 名を上回る参加者があり、興味深い講演、それを受けた熱心な質疑が行われています。活発な学会活動状況の継続を喜ばしく思います。研究会・談話会を運営されました幹事の皆様に感謝申し上げます。

今後の学会活動状況として、これから行われる部会や研究会・談話会などの開催案内を掲載しました。多くの皆様のご参加をお願いします。

平成 24 年度は 13 名の方が農業部門・植物保護の「技術士」に合格されました。誠におめでとうございます。農業部門・植物保護の「技術士」は、累計合格者数が 70 名を超え、当面の目標である合格者数 100 名に近づいています。大変喜ばしい状況です。これも、受験された皆様のご努力とともに、技術士対応委員会をはじめとする関係皆様のご尽力のおかげです。今回も大会会期中に技術士対応委員会主催で試験対策セミナーが開催されています。53 名の参加者で熱気に充ちたセミナーとなっています。今後も多くの皆様の合格を期待します。

学会ニュース編集委員会のメンバーが変わりました。濱本 宏、植草秀敏、宮田伸一の 3 名から有江 力、宇賀博之、芦澤武人に今春よりバトンタッチしました。新メンバーで学会ニュースの編集に新たな気持ちで取り組んでまいりますので、引き続きのご愛読をよろしく願いいたします。

(高橋賢司)
